
闇の化け物

黒ランプの魔人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇の化け物

【Nコード】

N6499K

【作者名】

黒ランプの魔人

【あらすじ】

青年は自ら思考を中断した。化け物となった自分を止められるのは、この少女だけなのだ。光を見出すことを諦めた青年は、闇に飲み込まれる。魔王になり損ねた少年、若き日に勇者失格の落胤を押された老人、そして《闇》と呼ばれる少女と謎の獣 物語は今、始まる。

プロローグ1 化け物から獣へ（前書き）

初めての作品です。獣化と二重人格大好きな作者の趣味丸出しですが、どうかよろしく願います。

プロローグ1 化け物から獣へ

私は、闇。

あなたはナニ？

そう言った少女の声が、今でも頭中に響く。

それより以前の記憶はほとんど消去されたためよく覚えていないが、これだけは言える。この声が無ければ俺は未だに《光》に自由を奪われ、ただ暴れ、叫び、ありとあらゆる破壊を尽くしていた。

今も厳密に言えば とうか一目見れば分かるのだが 自由には程遠いのだが、少なくとも精神的には圧倒的に解放されている。

だが、染み込んだ血の匂いは未だこの手から、いや体中から消えない。当たり前だ。血を浴びて生きているのは今も同じ。いや、もしかしたら前より増えたかもしれない。だがそんなことは関係なかった。

その時までの俺は自分が何者なのかさえ分からない、ただの……化け物だった。だが今は違う。まず、名がある。彼女が付けた名が。

「月影」

鉄格子の向こう側にしゃがみ込む彼女が俺を呼んだ。手にはリードが握られ、その先端は俺の首にかけられた、センスのかけらもない灰色の首輪に通じている。

別に気に入っていない訳じゃない。いや、むしろ今の俺には必須の物だ。元がホームセンターで買った700円消費税込みの安物だろうと、そんな些細な事は問題でなかった。大事なのはそれにか付けられた《呪》だ。

これさえあれば、俺は心置きなく彼女に忠誠を誓ってられる。心の肝心な部分を制御されるからもう暴走する心配はないし、余計な事、例えば人間だった時の事などを思い出さずに済む。戻りたいと思うことは前からあまりなかったが、今では完全に消え失せた。これで、いいんだ。

地面にふせっていた俺は頭だけを起こし、要求通り彼女が差し出した手を舐めた。

「いい子ね、月影」

彼女のもう片方の手が俺を撫でるたび、頭がぼつつとなくなってややこしい事が考えられなくなるのが分かる。だが俺は特に抵抗する事なく、そのまま目を閉じた。そして、全てが闇に包まれる。

名前。そういや昔も持っていた気がする。何だったか。まあ、いや。

プロローグ1 化け物から獣へ（後書き）

感想、意見、文字の間違い指摘等お待ちしております。ああ、無事続けられるだろうか……頑張ります。

プロローグ2 組織

は、とある組織に属する一介の人間だった。

の仕事は単純明快。ただ、殺すだけ。来る日も来る日も、ただただ血にまみれていた。だが、彼は決して組織に忠誠を誓った訳でも、また手渡される莫大な報酬が目当てだった訳でもない。

なぜなら彼は警察の、後に彼曰わく《光》のスパイだったからだ。

は《光》に拘束されていた。従わねば名前入りの顔写真を日本中にばらまかれ、当時彼が人並みに持っていた夢はあまりに儂く消え失せてしまう。

少年時代軽い気持ちでやった物事の代償にしては大き過ぎるが、それでも当時の に見れば十分罪滅ぼしの意味を持っていた。

今でもそうだが彼は一部の例外を除く「人間」に価値があるとは思っていないかった。そしてその例外の中には、彼自身もまた入ることは無かったのである。だが人間の「夢」は別だ。可能性。その言葉に当時の は全てをにかけていた。

《光》は の社会的な自由と引き換えに、組織への命をかけた潜入を命じた。

の取り柄は、決して人に褒められはしない職に就いた父を手伝った結果、次から次に発生するゴタゴタを片付ける内に身に付いた腕っぷしだけ。そんな彼が組織に近付ける方法など、一つしか

ない。《光》もそれは承知だったろう。

入ること自体は意外と簡単だった。《光》に身分の偽装を手伝ってもらい、金を渡した内部の人間に紹介を頼むだけ。すると、すぐに仕事が与えられた。

新入りの下っ端に捨て駒という構図が一発で分かる内容。終わっても終わっても次々と降ってわいてくる。だが　　は死に物狂いでそれら全てをこなしていった。そしてなんとか生き延び続け、組織内でそれなりに名も上がっていった。だが、所詮腕だけでは下っ端止まり。集められる情報も限られる。

組織はいわゆるサイコ集団。異世界への介入とやらを、本気で実現しようとしている。これが　　が三年間組織に身を置き、殺して殺しまくって命からがら手にした唯一の情報だった。

バカゲテイル。

《光》は　　に失望した。同時に、彼の命を守る手段に手を抜き始めた。結果、間もなくして組織に正体がばれ、彼は拘束されてしまう。

だがそれによって、彼はそれまでどんな手を尽くしても入る事出来なかった、閉ざされた一室への潜入に成功する。無論、意図してそこから出る事は叶わないが。

眠らされた　　は、それからの事を全く覚えていない。ただ数時間後、気が付いた時には周囲は血の海で、変貌した　　の前は一人の少女が立っていた。

はその少女の事を知っていた。たまにこの建物内で見かける、組織の雰囲気から浮きまわった少女。

名は和泉佳尾。何の用かは知らないが、随分前から頻繁にここへ来ていたらしい。彼女のことは《光》には報告していなかった。どうやら幹部の一人・和泉雄二郎の一人娘らしいが、彼女自身はただの女子高生の筈だからだ。

だったらなおさら、何の用事でこんな犯罪組織に寄っていたのかという話だが。まさか父親に弁当を届けに来ていた訳ではあるまいし。

ともかくその時、その彼女の父親もまた、紅に染まって沈む物体の一つと化していた。だが、そんなものまるで存在しないかのよう
に少女は見向きもせず、
に全く物怖じせず両手を差し伸べた。

全てを包み込む、闇の微笑みを浮かべて。

は朦朧とする意識の中、少女に元右手だった前脚を差し出していた。さつきまで沸いていたであろう血の騒ぎが収まるのが分かる。

静かに、心が彼女の微笑の中に沈んでゆく。こんなに落ち着けたのは、果たして何年ぶりだろうか。
は首筋に異物が装着される金属音を聞きながら目を閉じた。

「よろしくね、月影」

その言葉を合図に
の意識は深く沈み、そして
その頭から、ありとあらゆる記憶が消え去った。

災難の魔皇子

「どうなってんだ、こりゃあ」

俺様は呆然と呟いた。

目の前に広がるのは見渡す限りの荒野。所々煙が上がり、人っ子一人見付からない。

だがこの俺様が若年性認知症にでもかかっていない限り、ここはほんの二、三十年も前までは俺様のクソだがれっきとした親父である魔王陛下の治める、魔界一発展した国家「ラグワード」首都の壮大な街並みが広がっていた筈なんだ。

だが、この有様はどうだろう。何度も言うが、決して俺様が若年性認知症にかかった訳ではない。もう若年じゃないだろうとかふざけたことを抜かす奴もいたが、即クビにした。いくら八十路を迎えつつあるからといって、そう簡単にジジイ判決を出してはならないのである。そもそも俺様は魔族だ。普通の人間の五倍の寿命を持っている。要はまだ十六な訳なのだよ、全く失礼な。

閉じていた目を開けて再び辺りを見渡す。ああ、蒼空がきれいだ。

ふと現実逃避を終わらせないよう、もとい幸せだったあの頃をふりかえろうとして、何故かどうでもいい親父の事を思い出す。

まだ一世紀半しか生きていなかったのに、あの男は既に半分八ゲあがっていた。今頃残量は四分の一あたりだろうか。仮にも魔王なあいつは俺が長期の戦へ出る間際。もしかすると訪れるかもしれないな

い死を覚悟して、自室で死に装束の鎧を装着しているその最中。扉を開けた親父はいつになく重々しい口調で俺にこう告げた。

「ここに書いてあるものを買ってきてくれ」

ストウルの財布、レーミヤの帽子、カタンマイトの指輪 e t c ……

「……なにコレ」

「いつやあ、実はサリーちゃんとヌアンちゃんとネイミーちゃんと（以下略）ええと、それに」

「もういいわっ！」

ドガシャーン！！ と、俺様が怒りにまかせてテーブルをひっくり返したのは、例え数十年前の出来事だろうと記憶に新しい。

あのクソ親父が数えるのも億劫になる量の愛人たちに頼まれたブランド品を買い求める旅、もといスカラ地方で起こっている内乱を鎮めに、俺様は八万の大軍勢を率いて旅立った。

内乱自体は約三年で片付いたのだが、直後に隣国のデオパード軍が攻めて来た。恐らくは王子たるこの俺様を狙ったことだろうが、甘いわっ！！ と、一瞬（つつても二ヶ月程）で尻払った。

だが、だ。それ以降も一つの騒動を片付ける度に、狙い澄ましたかのように新たな厄介事が降りかかり、俺様達の帰国進路を邪魔してくる。どうも妙に感じた俺様は一つ賭けを試してみた。

もし何者かが俺様個人を狙ってこんな事をしているのだとしたら、

兵には何の関係もない。彼らにも待つてゐる家族がいるのだからと、俺様は王室の鏡のような立派な決断をした訳だ。

俺様は自軍と別れ、別ルートで帰路を歩んだ。するとどうだ、やはり俺様の方に面倒事は舞い降りて来る。しかも今回は問題が一人でも解決出来そうなものになつていたので。

やはり、何者かが俺様を生きたまま国に帰らせないための策略だったのだろうか。だが、それを確かめる術は今の俺には無い。

三ヶ月後、別れた兵士達が無事国へ帰り着いたという情報を、三ヶ月前から二キロしか移動出来ていない俺様の元に届いた。

回想終了。あれから数十年。根性で帰国した俺様は、今ようやく故郷の土を踏まんとしていた。ただし、なにかが燃え上がった後の、灰のような土だが。見れば人一人いやしない。

人里に入れば確実に厄介事が俺様を出迎えてくれる事は判明済みなので、ここ十年程近付いていない。衣食住は自然界から確保出来るので問題なかったが、確実に手に入らないものは存在する。すなわち情報だ。

「一体、何が起こつたんだよ……」

改めて、俺様は溜め息をついた。

無表情な老人

「あ、ボス」

その声を発した少女　和泉佳尾の前に現れたのは、初老の老人だった。

背後に三人の屈強な黒服男を従えたその老人は、この立派な『犯罪組織』の拠点たるビルの廊下で明らかに場違いな佳尾を見ても、訝しがる事なく言葉を返す。

「久しぶりだね、佳尾君。頼んでいた仕事は順調かな？」

声は穏やかなのに、そこからはあからさまな程の不気味さを感じ取れる。

老人は深く刻まれた数多いシワを微々たりとも動かさず、まるで傀儡のように唇のみを動かしていた。同じく無表情な黒服達と相まって、そこには一般人ならばすぐに逃げ出したくなるような空気が出来上がっていた。

だが佳尾の方は特に気にしていないようで、そのままニコリと笑顔を返した。

「だいじょーぶ、順調順調！ 私たち、もうその辺のカップルなんて目じゃないってくらい仲いいんですよ？」

彼女の言葉からはまるで親しい友人とお喋りでも始めるかのような気安さすら感じられる。老人の、次の言葉が無ければだが。

「それは良かった。一刻も早く、あの魔獣にはこの組織の立派な兵器となつてもらわねばならないからな。しかし《あれ》が元人間とは……全く、魔王の力とは恐ろしい。だがそれを全て吸い込んでおいて姿が変わつただけで済んだ彼も、大概普通ではなかつたようだが……流石は二百五十五の任務を身一つでこなし切つた　君、といったところか」

その言葉に初めて佳尾は笑顔を崩し、反論した。

「もう、ボスつてば。　じゃありませんよ、月影ですうつ」

頬を膨らませて怒る佳尾に、老人は微笑ましそうな声で　しかし表情は相変わらず無いまま　彼女をなだめた。

「ああ、そうだったな。彼の《闇》たる君が付けた、大事な名だ。もう彼は　君ではない……しかし　君は警察のスパイだったとはいえ、十分過ぎる程組織に尽くしてくれた。警察に脅しのネタにされていた過去の恥は、私が揉み消しておいてやる……そう、月影にも伝えておいてくれ。まだ、その位の理解力は残っているのだろうか？」

「残ってません!!」

佳尾の一瞬の否定に、老人を始め黒服達までが啞然とした。

「だって、他の人の言葉を理解しちゃうたら私に頼ってくれなくなっちゃうじゃないですか。だから生きるのに最低限必要な記憶以外は、ぜーんぶ消しちゃいました!」

事も無げに言つてのける佳尾に、黒服の一人が詰め寄つた。

「ばつ、馬鹿か貴様は！首輪に込められた精神掌握の呪は、名の通りそいつの精神を掴む事で成り立っているのだぞ！？ 全てを忘れるという事は、その掴む精神が無くなるということだ！ そうなると、またあの時のように理性を失つて……今度は、誰にも止められなくなつてしまふぞ！」

狼狽した黒服の一人がまくし立てる。だが佳尾は首を傾げ、男が何を慌てているのかわからないという事を示した。

「別に、何も起こつてないわよ？ むしろ怯えて外にも出ようとなないんだもん」

その言葉に老人は眉をひそめた。

「……月影はどこだ」

闇の少女

その場所にはひたすら闇が広がっていた。だが、若干の光は確かに存在する。俺はそれがただ眩しくて、ひたすら目を瞑り続けた。

ここはどこだったか。この空間の外には何があるのだろうか。そもそも外なんてあるのだろうか。

何故、俺はそんな事を延々と考え続けているのだろうか。

いや、多分意味なんて無い。ただ何かで頭を埋め続けないと、何か恐ろしいことが起きる気がするだけだ。

そんな、漠然とした恐怖に意味なんて無いのかもしれない。それでも俺は考え続ける。そう、あの人が

《闇》が来るまで。

「つ、き、か、げ〜〜」

何もかもが分からない。目の前の少女がいる限り、知る必要などないのかもしれない。俺は月影　ほかに、なにかかんがえるひつようなんて

「私に分かるかね、月影君」

佳尾が呼びかけた途端、目の前の鉄格子の向こうで何か動く気配がした。しかし次に私が声をかけるとピタリと止まり、それっきり寄って来ようともしない。私はその疑問を佳尾にぶつけた所、

「あつたり前ですよ！ だって私以外の人間、ていうか生物の記憶なんてもうありませんから、警戒してるんでしょうねえ。でもだいじょーぶ、ボス自慢の親近感オーラでなんとかしちゃって下さい！
！ こーゆーのは自分で頑張るものですから、私は手出ししませんよ？」

とのことだった。

「暗いな……電気を付けてくれ」

部下の一人に命じ、入り口にあつた筈のスイッチまで走らせた。入ったばかりは外からこぼれる明かりでまだ充分視界が広がっていたのに、それ以降は何も光源が無く、奥へ進むにつれ一気に暗闇と化していった。

佳尾が父親亡き後一人で暮らしているこの屋敷は外側から見れば大きいとはいえ嫌みを感じさせない程度の上品さを持っており、まさか地下にこんな陰惨な牢獄が広がっているなんて誰も考えはしないだろう。

血の匂いが充満している。佳尾の父が自宅で生体実験（人含む）をしている事は私も知っていたが、その犠牲となった者達のだけではない筈だ。何故ならここに来るまでに通り過ぎたどの場所よりも、この檻の方が臭気が漂っている。恐らくまだ、新しいものだろう。

我々としてこの匂いに慣れてはいるが、決して気分の良いものではない。

なのに何故、この佳尾という少女は楽しそうに歌など歌っているのだろうか。

一体、何をその華奢な腕でこの檻の中の獣のために運んでいたのだろうか。

この少女は、一体どこで壊れたのだろうか。

父親を、目の前にいる獣に殺された時？ いや、断言出来るが絶対に違う。あの事件の直後、父親を含めた大量の無惨な死体と血が溢れかえった部屋の中。首輪をはめたばかりの獣を抱きしめながら、少女が浮かべていた笑顔を私ははつきりと覚えている。

その時のそれと、数年前に初めて組織の本部に来た際、通りすぎた私に困惑に満ちた顔で助けを求める入り口の見張りに銃を突きつけられながら、

「すみません、父が忘れた新薬投与済みのサンプルを届けに来たんですけど」

と、まるで会社に弁当を届けに来たみたいな口調で布に巻かれた

人間の右腕を差し出しながら浮かべていた明るい笑顔とでは何ら変わっていない。

その事を知った彼女の父親は彼女を叱るどころか頭を撫でて見どころがあると褒め、そしてそれ以降、半ば助手みたくにして何度もここへ連れてきたのだ。

私も特に止めはしなかった。この少女は初めからどこか壊れている。ならばこのまま一般社会に無理に馴染ませようとするより、このまま裏の世界に身を置いた方が彼女のためになる筈。今までの経験から、私はそう判断していた。

突如、天井に連なった電球が一気に輝き始める。暗闇に慣れていた眼を一瞬細めてから、鉄格子の奥で同じように、いや急に広がった光に怯えるように身をすくめる獣を確認した。

それは狼に近かった。だが通常のそれのように、犬と間違えられるような事は断じてないだろう。何故ならその毛並みは蒼が混ざりつつ黒ずんだ銀色で、目元は血のような赤に縁取られている。何より決定的なのは、額に短い角が生えている所か。

「おいで、月影」

佳尾が呼びかけると、うずくまっていた獣は恐る恐る顔を上げ、助けを求めするように彼女の前まで駆けた。佳尾もそれに応え、優しく包み込んで背をさすってやる。その様子はまるで母と子のように見えた。確かに、これなら暴走の心配はないだろう。しかし。

「佳尾君、私は彼を忠実な組織の兵器にするよう言ったのだよ。これではただ君に依存した臆病な子供ではないか」

「そーですけど、何か問題あります？」

悪びれもせずそう返す佳尾に、私は呆れて首を振った。

「君に任せたのは失敗だったようだ……まあ良い、月影は改めて組織の方で教育し直すでしょう。おい」

私の命に黒服の部下がリードを持って、相変わらず震えながら佳尾に身を預けていた獣に近付く。

部下は獣の様子に油断してしまっていた。別に彼が能無しなのではない。彼らは殺気に応じて対処する習慣が付いてしまっていて、そして直前までこの獣は全くそれを発していなかったただけだ。

もう一つ彼のために弁解するならば、この獣は部下が首輪に手を掛けた瞬間初めて殺気を発すると、器用にもすぐ行動に移り人間には到底対処不可能なスピードで部下に襲いかかったのである。

私の経験から言わせてもらうと、殺気というのは少なくとも人間の場合発してから行動に移るまで時間がかかる。そしてその事を身を持って知っていた部下は、その知識故に人外存在に殺された。

ふむ、確かに私の組織には対バケモノのプロがない。この私は別としても。となると、力で無理に彼を押さえ込む場合の被害は計り知れないだろう。

ならばやはり、若干結果が変わってしまってもこの少女に一任した方が安全なのかもしれない。幸い、精神状態はともかく肝心な攻撃力は衰えていないようだし。

と、私はひしゃげた鉄格子とそこから抜け出した獣に頭を食いちぎられた部下の死体、それに彼の血と肉に汚れながら、今正に私に噛みつかんとしている獣を眺めつつ考えた。

同僚の仇討ちと私の身を守るために銃を発砲しようとしている残りの黒服達。私は彼らに手を出さないよう指示し、血にまみれた銀の獣へ杖を構えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6499k/>

闇の化け物

2010年10月14日14時56分発行